

耐婚・離婚・復婚：女性禁酒物語作家の結婚観

著者	森岡 裕一
雑誌名	研究論集
巻	111
ページ	59-72
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.18956/00007907

耐婚・離婚・復婚 — 女性禁酒物語作家の結婚観 —

森 岡 裕 一

要 旨

女性禁酒物語作家の作品では、被害者としての妻にスポットが当てられ、酔いどれの夫に如何に対処したかが前景化される。すなわち、女性が禁酒物語を書くことは、家庭における女性の立場を考えることであり、夫との関係、端的に言えば結婚の意義と離婚の可能性を考えることにつながっている。本稿はそうした問題意識に立ち、女性禁酒物語作家の作品を、妻がひたすら耐えて夫との関係を維持する「耐婚」、夫との関係を自らの意志で断つ「離婚」、いったん関係性を断つ後に復活させる「復婚」の三つのパタンに分類して代表的作品を対比的に分析する。そのうえで、女性—禁酒—離婚というこれまであまり顧みられることの少なかった側面に光をあて、キャロル・マッティングレイの先駆的研究を補い発展させることをめざす。

キーワード：禁酒物語、耐婚、離婚、復婚

論者は、以前発表した論文（森岡、2015）のなかで、家庭が背景であるはずの禁酒物語において離婚の主題が皆無であること、「真の女性崇拜神話」および禁酒物語の全盛期が1820年から1860年ごろであって、その後、禁酒とは別に離婚をテーマにした小説が書かれ始めることを指摘した。禁酒物語に見られる離婚の不在はいわゆるドメスティック・イデオロギーの呪縛によるものだというのがそこで得られた結論だった。

この主張はいまだ妥当なものと思えるが、前掲論文で希薄であった視点、すなわち女性の作家によって書かれた禁酒物語に見られる特徴を精査し、ジェンダー・バランスを考慮して補足的に論を発展させるというのが今回の狙いである。男性作家の場合、家庭の問題という意識より、男性個人の破滅もしくは救済のドラマが中心となる。夫婦間の問題にしても、男女の生々しい関係は取捨され、19世紀感傷主義の物語にしばしば見られる父と娘の関係に置換されることが多い（森岡、2008）。しかるに、女性作家の作品では、被害者としての妻にスポットが当てられ、酔いどれの夫に如何に対処したかが前景化される。女性が禁酒物語を書くことは、しばしば家庭における女性の立場を考えることであり、夫との関係、端的に言えば結婚の意義と離婚の可能性を考えることにつながっている。

女性の視点から禁酒物語を考察した本格的な先行研究は少ない。そんななかでキャロル・マッティングレイ、『節制のきいた女たち』（1998）および彼女が編纂したアンソロジー『女性作家の水滴』（2001）が規範とすべき研究であることに異論はないだろう。マッティングレイは両者あわせて50作品ほどを扱っている。禁酒物語は本格的な小説仕立てのものから、禁酒運動支援のパンフレットの類をふくめ夥しい数が流布したため、マクロ的に考察する場合に対象をどのように絞り込むかで扱いの恣意性が問題となりうる。そこで、本論文では、主要な作品のみに限定するため、マッティングレイの扱った作品に、禁酒物語黄金時代というべき1840年代に発表された二作品を加えてそれらを考察対象とした。

ただし、マッティングレイの本は包括的研究であって、家庭観、結婚観に特化した掘り下げがなされているわけではない。リディア・シガーニー、ジュリア・フレンド、メアリ・チェリスら重要作家の作品を通じて、女性—禁酒—離婚の関わりというこれまであまり顧みられることの少なかった側面に光を当てる本論考は、マッティングレイの先駆的研究を補い発展させるものとなるであろう。

はじめに、議論を明確化するための方策として、以下で分析する作品の類型化をしておきたい。男性作家の場合と同様、圧倒的多数の作品は、困難な状況下、妻がひたすら耐えて夫との関係を維持する「耐婚」型に属している。二番目はごくまれに夫との関係を自らの意志で断つ「離婚」型、そして特殊なものとしては、いったん関係性を断った後に復活させる「復婚」型が三番目にあげられる。ただし、禁酒物語は近代的リアリズム小説とは違い、夫婦の法的関係や手続きなどのディテールについては語ることがない。よって、本論文で「離婚」とは法的な夫婦関係の解消を必ずしも意味するものではなく、「離婚」「別居」双方をふくむ同居の停止を指し、普通の夫婦関係の破たんや終焉を表わす言葉として用いることとする。

最初に1840年代のほぼ同時期に書かれた二作品を取りあげる。両者は典型的な耐える妻の物語（耐婚）だが、対照的な結末である点が興味深い。メアリ・フォックス作『破滅した教会執事』（1847）は、前途を期待された教会執事が酒で墮落、仲のよかった妻との関係が壊れ家庭崩壊する物語である。主なプロットである執事が酒で身を持ち崩す話は禁酒物語の定番であり、この作品独自の新鮮味はない。注目すべきは、それに対する妻の変化である。彼女は、愛する娘の存在に支えられ、困難な状況をひたすら耐えしのぶ。ところが、娘の死により心に穴があき、そのため神にすがり祈るも応答はなく、「神に見捨てられた」（31、以下本稿中の引用はすべて拙訳）と感じて絶望に陥る。彼女の心を心配してくれる友人はいるものの、「彼女は慰められることを拒む。彼女の心は壊れ、彼女の精神は砕け散った」（32）とあるように、鬱状態から狂気の世界へと彼女の人格が次第に崩壊する過程が語られている。男性作家の作品でも妻が発狂するというエピソードは散見されるが（たとえば T.S. アーサー『酒場での十夜』（1854）

のスレイド夫人のケース)、いわば事後報告的にさらりと述べられことが多い。『破滅した教会執事』のように、短い作品のわりにはかなりのスペースを割き、酒害の結果による妻の人格崩壊の様子を綴ったものは珍しいのではないか。

彼女の怒りの矛先は夫に向かい、髪の毛をかきむしりながら夫に悪態をつく「おぞましく恐ろしい姿 (awful and terrific object)」(33) は町の人々の憐みを誘う。しかし、不思議なことに、彼女自身もさることながら、発狂前に何かと彼女を励ましたり、発狂後には医療施設に彼女を入れようと試みる町の住民も、一度たりとも彼女と夫を引き離すことを考えた気配はない。離婚の可能性が示唆されることはまったくなく、「耐婚」がすべての前提となっているかのようだ。その意味では、本論の冒頭でふれた禁酒物語のドメスティック・イデオロギーの縛りがこの作品でも効いていて、女性作家独自の視点が見られるわけではないが、ただ、被害者としての妻により強く寄り添う姿勢は特徴的である。

悲惨な末路にいたる『破滅した教会執事』とは対照的に、C.W. デニスン作『ガートルード・ラッセル』(1849) は妻の努力の甲斐あって、夫が見事立ち直る典型的ハッピーエンドの作品である。プロットは定型そのもので、みなに祝福され新婚生活をスタート、子宝にも恵まれた夫婦が、夫の大量飲酒のため家庭崩壊に直面する物語だ。この物語の夫の行動は、『破滅した教会執事』の夫のそれをはるかに上回るひどさである。深酒で負傷したあげく失職、山っ気で始めた事業に失敗しますます酒に逃避する。新たに見つけた勤め先で不注意から火事を起こすかと思えば、酒に酔って寝込んだため幼い子供が井戸に落ち死亡、さらには野宿中にDT(震顛譫妄)発作で沼地に足をとられ死にかけるなど、まさに手に負えないアルコール依存症者である。

ところが、「悲しみ (sorrow)、苦悶 (anguish)、受難 (suffering) などの言葉では生易しすぎる (too tame)」(29) ほどの体験をさせられながら、妻は夫に愛想をつかさどころか、「わたしは夫のために祈ります。まだまだ希望は捨てません。あの人にはわたしの言うことを聞いてくれる。きっと聞いてくれますとも (I know he will)」(8) と言い、また、夫に向かって「わたしはあなたのもとを離れることも見捨てることもできません。わたしの居場所 (post) はいつもあなたのそばです」(31) と言っているのけるのである。自らの行いを恥じた夫から自分にはふさわしくないゆえ別れてほしいと言われても無視、親族や友人から再三、夫と別れろと勧められたときも、「あのひとを救えるのは今や私しかいない (No one can save him now but me)」(51) と離婚を頑なに拒むのみだ。こうなると妻ガートルードの生きがいは夫の更生のみ、自身の人生が夫の人生と一体化して、彼女はいわゆる「共依存」状態にあると言っても過言ではないだろう。これは男性禁酒物語作家の作品に見られるパターンでもある。

最終的に娘の死で夫は悔悛、立派に更生する展開となる。このあたりも古典的「耐婚」物語に、父親に対する娘の涙や死のもたらす感化力が加味されたセンチメンタルな物語の運びと

なっていて、別のところで詳細に分析した禁酒物語が19世紀感傷小説と共有する感傷性を典型的になぞっており（森岡、2008）、男女の別なく多くの物語作家が多用するプロット展開となっている。この作品においても、離婚の可能性は言及されはするものの、妻本人にとってはその可能性は視野になく、更生した夫の横に微笑みたはずむ妻の姿を最期の場面で描いた作家のまなざしは夫を信じ耐えしのんだ妻を祝福しているかのようだ。マイケル・プリングルは禁酒物語で女性が演じる役割を「苦悩しながら黙って耐える人（the anguished, but silent sufferer）」(75)と呼んだ。ガートルードはまさに、その典型である。その意味で、先にみた『破滅した教会執事』の妻は、黙って耐えるのではなく、夫に反抗を示す点で対照的だと言えるだろう。しかし、反抗、黙従いずれにせよ、離婚の可能性はなく、したがって両者は形を変えた「耐婚」物語として読まれなければならない。

「耐婚」モチーフをさらに理解するために、もう一組の作品を検討したい。詩人としても名高いリディア・シガーニーの『大酒飲み』（1834）の妻ジェインは、夫の仕打ちに反抗せず黙って耐えしのぶ典型的な犠牲者だ。しかし、彼女は、かつては優しく彼女が愛するに値する徳を備えていた夫に再び戻ってもらうべく最期まで希望を捨てない。彼女の態度を、作者は「自己否定の義務観（self-denying duties）」(44)と呼んでいるが、ここにもかすかに共依存の兆候が見て取れる。その後、夫は息子の死を契機に一度は立ち直る。この展開もすでにみた幼い子供の酔いどれの父親に対する感化力に基づく定番だが、この作品の特異な点は、それからの展開である。多くの禁酒物語では、幼い子供の死により家庭の平和が回復されハッピーエンドにいたるのだが、この作品では、更生したと思われた夫は、ふたたび飲酒をはじめ、結局、酒が原因で増水した川に落ち溺死する。敬虔なジェインが、ひたすら神に捧げた祈りの回答が、皮肉にも夫との死別だったというわけである。ある意味、「耐婚」生活の終着点が、死別という形の「離婚」であったと言ってもいい。彼女は残された娘とともに、兄の住む町に戻り、それなりに平和な暮らしを取り戻す。だが、物語が次のような言葉でしめくくられていることは見逃せない。

これからずっと寡婦として生きていかななくてはならないという切ない想い、あるいは夜毎の祈りの折りにあふれ出る溜息のなかに、ひょっとして、侵しがたく深く根づいた悲しみ — 身をあやまった夫の記憶と、飲酒をやめさせられなかった惨めさが見出せるかもしれない。(45)

家庭すなわち結婚の呪縛、言いかえれば、夫との共依存関係をいまだ脱しきれない妻の姿が簡潔に語られている。夫の死による妻の解放という、一見ラジカルとも読める物語展開にあって、

渦中の妻の本音を付度したこの一節は、この作品が本質的に「耐婚」物語以外の何物でもないことを暴露している。

ジュリア・フレンド作『チェスター家』(1869)は、『ガートルード・ラッセル』に似て、妻が最後まで夫を見放さず更生へと導く物語である。すでに結婚前から夫の酒癖の悪さを周囲は心配していたが、彼女は「彼はわたしを愛してくれているから、わたしのために心を入れかえてくれる」や、「わたしには彼を救うことができる」(21)と断言してはばからない。兄から離婚を強く勧められたときには子供たちのことを考えて一瞬迷いはしたものの、すぐに「あの人が生きている限り、一緒にいてできる限りのことをしてあげるのがわたしの義務だ」(122)と、自己否定と献身に貫かれた義務観で兄の勧告を拒絶する。「彼を悪魔から救うという犠牲の祭壇にわたしは身を委ねてしまった」という大仰な言葉まで発する彼女の決意を、「文句を言わない忍耐力と偉大さ(heroism)」(19)、「高貴で愛情深く、自己犠牲に富む」(31)などの最大級の賛辞で語る作家の頭には離婚による決着など想定外であったのだろう。

これまで見てきた作品とは違い、主人公の妻はじつはさほど過酷な人生を体験するわけではない。家族の死、暴力などは描かれず、飲酒・禁酒のせめぎ合いもどこか抽象的なレベルで終始する。彼女が立脚しているのは、飲酒問題は個人のモラルの問題だとする道徳的説諭論であるが、途中から酒販売者の取り締まり、すなわち法による統治や、「適度な飲酒」を勧める有権者の欺瞞に話が及び、物語が進むにつれ妻の奮闘物語は拡散気味になる。これは、この作品が、作家がある人物と交わした交換書簡の形式をとっていることとも関わっている。そのなかで、チェスター家の物語に触発された酒害の一般論とその対策が幅広く論じられており、酒をめぐるひとつの家族の物語であると同時に、問題解決に向けた政治的アピールという二面性を秘めていることが、この作品の特徴である。

物語レベルにもどると、妻の主張にぶれはなく、道徳的説諭に突っ走る姿は、「耐婚」自体を楽しんでいる印象すら感じられる。そして、努力の甲斐あって夫に救済をもたらしたときの様子を作家は次のように描いている。

そして長い疲れ果てる年月の末、はじめて彼女は夫の頭を胸にいだき、子供たちはだまって彼女のまわりに集まる。彼女は、心からの喜びと感謝の涙をながしながら、夜の大気にその澄んだ美しい声を響かせるのだった。(204)

この場面は真夜中に目を覚ました夫が、まるで悪夢から覚めたかのように再起を誓い、妻に昔のように歌を聞かせてほしいと頼む場面である。引用にある描写から強く連想されるのは、ミケランジェロで有名な、キリストを抱く聖母マリアの姿「ピエタ」の図柄である。処刑されたわが子を抱く母マリアの慈愛と、夫を慈しむ献身的な妻の愛が重なり、いずれも強烈な母性を

感じさせる。なにより、酔いどれの夫ジョンより、飲酒・禁酒議論をリードし、物語の決着をつけた妻の存在感は圧倒的だ。夫を抱きながら甘美に歌って聞かせる姿は妻と夫の関係を越えて、母と息子関係を思わせる。この物語の妻の名がメアリ（マリア）であるのは偶然ではないだろう。

同時に、引用場面は、母のまわりに子供たちが集まって、父親を真中に家族が輪を描く構図をも示している。これは、もう一つのキリスト教美術の主題「聖家族」を連想させる。だが、義父ヨセフの位置にいるのは子供たちで、幼いキリストに当たるのが夫ジョンというように、父子の立ち位置が完全に逆転している。1874年刊『禁酒運動の大義の50年』の口絵として載せられた二枚の版画「飲酒の家」「禁酒の家」の図像学的解釈については前掲の論文で説明したが（森岡、2008）、要は、前者が暴力的な男性性が支配的な家庭であるのに対し、後者は、そうした男性原理を徹底的に排除した女性原理に基づく家庭の風景であるということだ。『チェスター家』が最終的にたどりついた世界が後者の平和な世界であることは言うまでもない。もちろん、最後に描かれる家庭の風景は願望に基づくファンタジーであるのかも知れないが、ある種フェミニズムの勝利の瞬間を映しだしているとは言えないだろうか。

ここまで「耐婚」型の禁酒物語を考察してきたが、プロット展開に関する限り男性作家の書く物語と本質的に差異はない。献身的に、ときには自己犠牲のあまり共依存状況まで引き起こしながら最後まで夫のもとを離れない妻の姿が印象的で、最後は夫の更生というハッピーエンドの場合もあれば、妻の努力の甲斐なく全員が不幸に終わる物語もある。これも、作家の性差には関わらない。ただし、これまでみた作品の真の主人公と言うべきは犠牲者の妻であって、その奮闘の物語が妻自身の視点でより微細に描かれているところに女性作家による作品の特色が見られるのである。

さて、次に、男性作家には珍しかった「離婚」タイプの作品を検討してみよう。ボルティモアの一夫人の作とされる『ブランデー一杯の対価』（1841）は、酒で弁護士としての仕事に支障をきたした夫を支えようとする妻の話だ。ところが、妻のシドニイは、これまでの作品の妻たちと違い、夫への再三の禁酒の訴えが聞き入れられないとなると、「彼女がそれまで感じていた真実の深い愛情が、嫌悪と落胆の感情へと急速に変わりつつあった」（17）という具合に、とことん夫を支える献身的な妻の役割を放棄する。そして、すぐに、「わたしはあなたの約束を信用もしなければ、あなたの更生への希望も持つてはいない」（18）とも言う。彼女の出した結論は「とうとうその時がきました。--- 別れましょう（we must part）」というものであって、「耐婚」型物語には見られない吹っ切れた展開である。しかも、「子供をあなたと同じ墓には入れたくない」（19）という捨て台詞まで紹介されるのは、この時代にあっては異色と言うべきだろう。

ところが、いったんは啖呵を切ったものの、「あの曰く言い難い (inexplicable) 至高の感情、女性が初めて愛した対象に捧げる愛情が支配的だった」(20) せいで、シドニイはもう一度夫にやり直しの機会を与えるのだ。このあたりは「耐婚」物語のプロットと近いものがあるが、何度約束を破られても屈することなく夫へ献身的に奉仕をし続ける妻たちとは違って、シドニイには、これは夫への思いを断ち切る最後の機会でしかなく、彼女の決意は固い。

案の定、夫は簡単に立ち直りはしない。そして、酔いどれ状態で家に戻った夫を待っていたのは、「あなたは最終の選択をした。結局、家族の幸せよりブランディグラスを選んだんです」(22) というシドニイからの手紙だった。作品は、離婚の末、夫は破滅、別れたシドニイも苦労の末若くして病魔に倒れるという悲惨な結末の告知で結ばれている。

一見すると、この物語は、離婚という選択の愚かさを訴える離婚否定論とも取れようが、作者の真意はそこにはないだろう。シドニイは、幼い子供とともに夫の家を出たのち、必死で働き自活することを試みている。彼女の得た職はまっとうな (respectable) ものではあったものの、時間を要するわりに報酬は少なく、心身ともに疲れ果てたあげく病におちいたのである。ここには、女性の社会進出の困難さという問題意識の萌芽さえかいま見られる。作品最後で語り手は、シドニイや子供たちをこのような目に合わせ、自分の身を破滅に追い込むことで、夫がたった一杯のブランディのために大変大きな対価を支払ったことを疑う者はいないと述べる。愚かな選択というなら、それは妻シドニイのそれではなく、夫の飲酒に向けられるべきだというメッセージであることは明らかだろう。離婚という選択に対する作家の立ち位置は不明確だが、酒害のもたらす結末が離婚とそれに伴う家庭崩壊、全員の不幸であるという強い主張が読み取れるのだ。

女性禁酒物語作家の第一人者メアリ・チェリスは、離婚の主題を積極的に取り上げた数少ない作家のひとりである。ほぼ同時期に書かれたふたつの作品を検討してみよう。『ライオンの口で』(1872) には対照的な二人の妻が登場する。そのなかの一人マギー夫人は、どちらかと言えば「耐婚」型の女性ではあるが、まったく同じというわけではない。家庭をかえりみず痛飲を繰り返し、妻と子は「自分の意志にこびへつらう奴隷 (chattel) 」(151) としか考えない夫に対し、「非難されるべきはあの人だ」(27) と彼女は言う。また、彼女は、そんな父など死ねばよいと言う息子に対し、「それは悪い (wicked) 考えです」と諭しつつ、「悪いと非難したはずの願いが彼女の心にこだましていた」(47) とあるように、自己を否定してひたすら夫に尽くす妻たちとは一線を画し、夫不在の人生を憧れる可能性をはらんでいる。

とはいうものの、この妻は「離婚」型には徹しきれない。息子は母に父のもとから去るべきだと言い、父に対しては、「お父さんがちゃんとしてくれれば、お母さんはあなたのところに留まるけど、そうでないなら、一緒にはいない」と互惠性の原理をふりかざす。ところが妻は、息子に詰め寄られ弱気になった夫を慰めるかのように、「励ましとやすらぎを与えたいという

漠然とした渴望 (a vague longing to give him strength and comfort) 」(158) でもって優しく接するのだ。最終的に妻と息子の支援で夫は改心にいたるが、長年の不摂生がたたり病の床に就く。父の願いで息子が聖書を読み聞かすと、「それは息子自身の感情を鎮め、彼が口にした祈りは祝福をもたらしたようだった。それにより母には希望がよりめばえ、父の心はより和らいだ (subdued) 」(195) と書かれている。この場面は、『チェスター家』でみた「聖家族」ならぬ逆転した父子の構図を思わせる。

ところで、この妻はマギー夫人と紹介されるだけでファーストネームは語られない。夫はジム、息子はトムであることが読者には冒頭で知られるのと対照的である。あたかも男性優位の世界で希薄な自己認識しかもてない暮らしを余儀なくされる女性の立場を示唆しているようだ。だが、むしろ、ここにはマギー夫人の態度に対する作者の距離感が示唆されているとも考えられる。それはもうひとつの妻のあり方を代表する女性がパッツイ・クインとフルネームで紹介される一方、彼女が縁を切った元夫が終始匿名である事実が傍証しているように思われる。では、チェリスがあるべき妻の姿を反映させているとも解釈できるパッツイをめぐる状況はどのようなものであったのか。

パッツイも最初は「耐婚」生活をおくっていた。元来、彼女には男性と同等の権利を女性が持つべきだとの信念があり、夫の「暴虐な扱い (tyrannical exactions) 」(225) には反発を感じていたが、プライドと夫の愛情を求める気持ちゆえ黙って耐えしのんでいた (suffered in silence) 時期もあった。しかし、彼女は、とうとう「夫を支えるために働くことを拒んだ」(226) のである。彼女の夫に対する立場は明快だが、実は、彼女の「離婚」ドラマの状況には少々、不可解なものがある。そもそも400頁をこえる長編中、彼女の「離婚」にふれた箇所はわずか二頁で、それもはっきりとは書かれていない。彼女は、夫に反旗をひるがえしたあとも惨めな状況で二年間生活を続け、それから唐突に、「彼女は自由になった (then she was free) 」(226) と書かれている。その直後に、「親戚や友人からも漂うように離れていき、もはや再会を願う気もなかった」とある。そのあとに「夫の墓に一粒の涙も流さなかったし、夫との思い出に対し、ため息ひとつつかなかった」という文が段落を変えて続くことから、その間の夫婦関係についての間隙を埋める作業は読者に委ねられている。何らかの理由で彼女が夫と死別した可能性があるし、あるいは、彼女が夫のもとを去り (離婚し)、その後、夫が亡くなった可能性も捨てきれないだろう。後者の場合ははっきりとした「離婚」だが、前者の場合であったとしても、夫を事故で無くした『大酒飲み』の妻ジェインの場合とは事情が大きく違っている。彼女は「夫が彼女の歩む道を横切ったことなどないかのように人生を歩むようになる」(226-7) とあるように、夫の存在はパッツイの心の中から消し去られており、少なくとも意識のなかでは、彼女はやはり「離婚」型の人生を生きていると言っていいだろう。

自身の「離婚」を巡る状況については簡潔にしか扱われないパッツイだが、作品中、彼女は

家庭性の象徴たる重要な役割を果たしている。彼女は、酔いどれの父親から保護した幼い娘 ケイティを引き取りわが子同然に育てあげ、いわば疑似家族を作りあげる。また、彼女は、よき助言者としてマギー・トム母子を助け、一時は三人で共同生活さえしている。作品の最後では死別したと思っていた実子ホルトンが戻り、彼女は幸せな家庭生活を取り戻すというように、パッツイを中心とした家庭性 (domesticity) が、この物語のひとつの柱ともなっているのだ。そんな彼女の支えは、神を敬う心と、男に依存しない自立心で、マギー夫人が古いタイプの女性を代表しているとすれば、パッツイは来るべき新しい女性像を示していると言ってもよい。

男の大量飲酒による家庭生活の崩壊に対して女性による家庭性の構築を、チェリスは、女性の「食」へのこだわり表象する。そもそも、けがをしたケイティにパッツイが食事をふるまっただけで痛みを忘れさせたところから、この疑似母娘の関係は始まっている。そのケイティは、「主婦の役割を任せてもらえるほど嬉しいことはなく、彼女は火をおこし、食卓を準備し、夕食をつくる」(219) 作業をパッツイ直伝で嬉々として始める。ようやく再会した息子のためにパッツイが作った朝食は、「長い年月、彼が食べたことのないおいしさだった」(330) と書かれているが、その他にも、温かな家庭のぬくもりを表す場面の随所に、食べ物とそれを心をこめて準備する女たちの描写が書きこまれている。女性一家庭一食事の三幅対は、『10セント』(1877) で、酒害に苦しむ男たちを救う手立てとして女性たちが残り物の食材を工夫して作る「貧者のスープ」(225) や、『パンとビール』(1882) で崩壊しかけた家庭を救うべく、女たちが連帯して手作りスープやパンの販売をする話など、チェリスの他の小説にも見られるところである。

『ライオンの口で』に登場する二人の妻、マギー夫人とパッツイのうち、作家の共感は後者にある可能性を先に示唆した。しかし、こと物語の印象に関しては、書き込みの厚みを考慮しても、両者に優劣はつけられない。あるいは、新旧の生き方が共存しているというのが現実の姿で、チェリスは中立の立場から両者を等距離で眺めているというのが案外真相なのかもしれない。

離婚の主題をさらに掘り下げた作品が、次に検討する『富とワイン』(1874) である。そのなかの一人ジェインの夫は、酒という悪魔の奴隷 (demon's slave) であり、妻子を自らの欲望充足のための僕 (servant, 24) としか見ていない。彼女は、夫から「愛されることもなく」、また「夫を愛してもいない」(unloved, unloving wife, 19) 妻だ。夫の存在自体がいまわしく思えるものの、さりとて法に訴える (つまり離婚する) にはさまざまなことを慮って反発せざるを得ない (every feeling of delicacy revolted, 62) 状態にいる。これは今までみた作品と似たり寄ったりの状況だ。息子は父の暴力を目の当たりにし、母に離婚を勧めるが、これも『ライオンの口で』のマギー母子の関係と酷似している。ところが、これまでみてきた妻たちとは違って、ジェインは息子のためにも離婚が最善の策だと判断すると、あとは毅然として現状打破に

立ち向かう。「これまで離婚など恐ろしく恥ずべきこと (disgraceful) だと考えてきたが、「もっとおそろしく、もっと恥ずべき選択肢がある」(68) と彼女は考える。さらに、彼女は、「世の中には、女性が結婚の誓いからの解放を要求するより、あらゆる虐待や侮辱に耐えなければならないと考える者もいる。もしその人たちの考えが正しいのなら、神さまお許しください。なぜなら私はその解放を要求するからです」(69) と言い切るのである。

ジェインは夫のもとを去ると同時に、実家からの財政支援をことわり、裁縫の職をえて自活する。そんなジェインの選択に世間の風当たりは厳しいが、彼女は想定内の出来事として堂々とわが道を行く。女性が快適と安全を求めて法に訴えるのは当然の権利だとしてジェインを支持するのは男性のソーンダース医師だが、「もし酔いどれの大多数が男性ではなく女性だとしたら、それに我慢する人は多くはあるまい」(97) という彼の言葉は、そのまま作者チェリスのメッセージに響く。19世紀末に近づくにつれて、犠牲者としての女性に変わり、あるべき強い女性像を呈示する作品がふえ、離婚のテーマを扱う作品が増え始めるとマッティングレイは言う (133)。いわゆる離婚小説の台頭を視野に入れた発言だと判断されるが、禁酒物語の枠内でそれを実践しようとしたのがメアリ・チェリスに他ならない。

こうみえてくと、『富とワイン』は純粋な「離婚」型の物語だと思われるかもしれないが、それほど単純ではないところに離婚を巡る議論の複雑さがひそんでいる。そもそも、物語全体におけるジェインのエピソードの比重はそれほど重くはない。むしろ、重点はメイベルという主人公を核とする複雑な人物関係にあり、ジェインの離婚劇が前景化されているわけではないのである。また、ジェインの話に限っても問題はあつた。作品の終わりで数組の男女が次々に幸せな結婚をするという筋立てになっているが、まるで作者が性急にハッピーエンドを演出している趣すら感じられる。とりわけ、そうした組のなかにジェインとソーンダース医師が入っているのはどのように考えればいいのだろうか。ジェインの年齢や、自主独立した生き方を考慮すると、独身のまま医師とは大人の関係を保ち続けるほうが、たくましい女性像を伝えるには好都合だと思われる。まるで、婚姻関係に基づく幸せな家庭の構築が至上命題だといわんばかりのプロット展開は、せつかくの「離婚」ドラマのインパクトを減じさせるのではないか。

しかも、もうひとつ見過ごせないエピソードがある。ジェインが一人で人生を切り開くなか、元夫が死ぬ。その際、「これでジェインも真に自由になったと感じるだろう (would feel)」(304) とソーンダースは述べる。これは、あれほど離婚を強く勧めた医師の発言とはうらはらの婚姻の呪縛を如実に示してはいないだろうか。法的な縛りゆえ、夫の死を待たなければ正式の離婚が成立しない状況があつたとも考えられるが、今までみてきたジェインの態度から判断するに、少なくとも彼女の感情面においてはすでに解放 (release) がなされていたと読むのが妥当だと思われる。しかるにソーンダース医師の発言、および、もしかしてその背後にジェイン自身の思いが重ねられているかもしれないが、それは、やはり、真の解放を押しとどめる婚姻の呪縛

力の強さを証すひとつの重要な発言だと考えられる。

「離婚」にこだわったチェリスではあるものの、尖鋭的な立場にいたることのできなかった人気禁酒物語作家の限界をここに読み取るべきか。あるいは、やっと離婚小説が書かれ始めた頃に、禁酒物語という隣接ジャンルにおいて、可能なかぎりの地点まで問題を突きつけた彼女の先駆性を評価すべきなのか。判断は微妙で即答はできないだろう。むしろ、伝統的な結婚観と新しい女性の生き方がせめぎ合い、模索の試みが続けられていた当時の状況にチェリスは敏感に同期していたと言うべきかもしれない。

三番目の「復婚」は、さらに例外的なパターンである。代表例として、エリザベス・エレットの「田舎での追憶」(1859)を検討しておきたい。幸せな家庭生活が酒で破壊される筋書きは定番だが、子供にまで暴力をふるう夫に我慢できず、妻ジェインは「子供を守るのが神に対する私の義務ゆえ、永遠にあなたのもとを去ります」(254)と言い放つ。狼藉を働いて留置所に入れられた夫が何度ジェインに会いに来てほしいと懇願しても、彼女の決意は固く、毅然とした態度で拒絶する。ここまでは完全な「離婚」物語である。

ところが二年後、夫が殺人の嫌疑で裁かれることを聞いたジェインは、突然自責の念にとらわれ、「あの人が有罪で死刑になるなら、私があの人を殺したも同然だ。世間があの人に背を向けたとき、わたしも見捨ててしまったのだから」(256)と苦しみ始めるのだ。そして、彼女は、彼のもとへ聖書と禁酒を勧めるパンフレットを届け、(元)夫を禁酒へと誘導する影響者(influencer)の役割を演じるのである。ジェインの努力の甲斐があり、夫は改心し、潔白が証明された彼は自由の身となって、ふたたびジェインと幸せな家庭の再建に励む。そして、夫が体験告白家として各地を講演して回るという「ワシントンアンの連鎖」が実現されたことを伝えて作品は終わっている。禁酒物語のパターンとしては、耐婚を経て離婚、そして再度の結婚にいたる「復婚」型となっている。

ジェインは、夫のもとを離れた二年間、立派に自活し子供たちを育てている。作品としてそこで終わってれば、新しい女性の生き方を描いた「離婚」型のドラマで完結していたかもしれない。だが、短編の制約もあってか、夫の横暴ぶりがあっさりとしか記述されていないため、ジェインの離婚決断のインパクトは弱い。そのため、物語としての面白さを出すため、ジェインの歩み寄りというひねりを最後に加えたのだと好意的に解釈することもできよう。しかし、それにしても、ジェインの心変わり是不自然で、彼女の自立の意志が結局は中途半端に終わってしまったことを考慮すると、そもそも「離婚」型のドラマが成立していたかどうかすら疑問だ。むしろ、この物語は、離婚のモチーフを組み込んだ特殊な「耐婚」型に属すると言うほうが、真相に近いのではないだろうか。つまり、夫の改心と再会を導くためジェインが耐え忍ばねばならなかったのが二年間の「離婚」期間であって、それゆえ、最後に実現する幸せな結婚(家庭)

生活の再建があるというわけである。そうなると、先にみたハッピーエンド型「耐婚」物語と本質的に差はなくなるかもしれない。しかし、たとえ不徹底でも「離婚」の事実は否定しがたく、離婚という思い切った手段を選択する女性たちの出現をフィクションの世界で記録した意義は大きい。あえて「復婚」型を提唱する所以である。

しかも、この「復婚」型については、たんに虚構作品上の夫婦のあり方を示唆したものにとどまらず、現実世界において同様の試みが模索されていたことをつけ加えておかねばならない。米国で女性として初めて叙任された聖職者アントワネット・ブラックウエルは、女性解放運動の推進者の一人だったそうだが、当時、離婚支持の急先鋒エリザベス・スタントンらの離婚の勧めの言説に危機感を覚えたという。あまりに自由な離婚が認められると、家庭の秩序の崩壊、性道德の乱れという社会不安をあおると考えたブラックウエルの出した結論は、「不幸な結婚をしてしまった妻は、合法的に離婚できる州へ行き（離婚し）、それから再び（夫の許へ）戻り、夫の救済のために働くことだ。離婚しようがしまいが、神と彼女自身の魂の前では自分が夫の妻であり、妻として夫に忠誠を尽くす義務があることを覚えておかねばならない」というものであったことを、他ならぬ女性解放運動の歴史をまとめたスタントン自身の本が伝えている（スタントン1889, 724-5）。伝統派と急進派の溝を架橋するため考え出された苦肉の策が「復婚」だったのである。

結婚をめぐる禁酒物語の三つのパタンの分析は以上だが、こと結婚に関して様々な対応が見出せるのが禁酒物語である。たとえばチェリスの『火難をのがれて』（1869）に登場するローダのように、男たるものみな酒飲みの素質があるとして、結婚自体を自らに禁じ、独身生活を貫く人物がいる。ほぼ同時期に書かれたハリエット・ストウの『妻とわたし』（1871）にも、結婚を勧める周囲の動きを無視して自立した生き方を選ぶアイダや、好きな男性との幸せな家庭生活を犠牲にしてパリで医学の道に進むキャロラインのような女性が登場している。本稿で分析してきた作品は、さまざまな展開はするものの、いずれも結婚を前提に物語が構築されていた。ところが19世紀末にかけて、結婚を選択肢としない「非婚」プロットが出現しはじめるのだ。これは結婚に対する考え方の時代変化を反映したものと思われる。そこで最後に、上記禁酒物語が書かれた19世紀中葉から後半にかけての結婚事情について一瞥しておきたい。

アメリカの公式離婚統計は1867年から開始されているが、19世紀の残り40年間、10年ごとに離婚数は1.7倍の割合で着実に増加している。その間の離婚事由、申請者の男女比、社会の受けとめ方については前掲論文（森岡、2015）で述べたのでここでは繰り返さない。また、離婚を巡る言説、とりわけこの分野の最先端を走っていたスタントンの主張についても詳しくはそちらに委ねるが、結婚を神前の聖なる誓いなどではなく、解消可能な「市民契約」と見なし、「たえまない敵意、冷淡、嫌悪のなかで結婚生活を続け同居することは、男にとっても、女にとつ

でも、自然、家庭、国家に対する罪」(“Speech”, 129)であり、結婚は「合法化された売春」(“Address”, 182)とまで断言するスタントンの考えと、禁酒物語に登場する妻たちの考えとの差は大きい。禁酒物語の盛んだった時代、1820年代から1860年代にかけては、その後に現れた離婚小説とは違い、離婚による解決というプロットが物語上で書かれることはほとんどないということはすでにふれた。いわゆるドメスティック・イデオロギーがまだまだ効いていた時代と言ってもよい。禁酒物語において、家庭維持の観念が少なくとも潜在的には前提となっていたのであり、禁酒物語に通底する家庭の呪縛の強さがあらためて確認されるのである。

謝辞

本稿は科学研究費助成事業（学術研究助成基金）による基盤研究（C）「19世紀アメリカ禁酒小説／運動におけるジェンダーギャップの研究」（課題番号15K02338）の成果の一部である。

参考文献

- Arthur, T.S. *Ten Nights in a Bar-Room, and What I Saw There*. Boston: L. R. Crown & Co. 1854.
- Chellis, Mary Dwinell. *Out of the Fire*. NY: National Temperance Society. 1869.
- *At Lion’s Mouth*. NY: National Temperance Society. 1872.
- *Wealth and Wine*. NY: National Temperance Society. 1874.
- *Ten Cents*. NY: National Temperance Society. 1877.
- *Bread and Beer*. NY: National Temperance Society. 1882.
- Denison, C. W. *Gertrude Russel, or Parental Example*. NY: Oliver & Brother Publishers. 1849.
- Ellet, Elizabeth. “A Country Recollection, or The Reformed Inebriate.” *Water Drops from Women Writers: A Temperance Reader*. Ed. Carol Mattingley. Carbondale: Southern Illinois UP. 2001.
- Fox, Mary L. *The Ruined Deacon*. Boston: Abner Forbes. 1847.
- Friend, Julia M. *The Chester Family: or The Curse of The Drunkard’s Appetite*. Boston: William White & Co. 1869.
- Lady of Baltimore, A. *The Price of a Glass of Brandy*. Baltimore: Robert Neilson. 1841.
- Mattingley, Carol. *Well-Tempered Women: Nineteenth Century Temperance Rhetoric*. Carbondale: Southern Illinois UP. 1998.
- Ed. *Water Drops from Women Writers: A Temperance Reader*. Carbondale: Southern Illinois UP. 2001.
- Pringle, Michael W. *Seizing the Moral High Ground: The Discourses of Alcohol in American Literature*. Doctoral Dissertation. Washington State U. 2000.

Sigourney, Lydia H. H. "The Intemperate." *Water Drops from Women Writers: A Temperance Reader*.
Ed. Carol Mattingley. Carbondale: Southern Illinois UP. 2001.

Stanton, Elizabeth Cady. Ed. *History of Woman Suffrage 1* Rochester, NY: Charles Mann, 1889.

—— "Speech to the Mcfarland-Richardson Protest Meeting." Ed. Ellen Carol Dubois. *The Elizabeth
Cady Stanton- Susan B. Anthony Reader*. Boston: Northeastern UP. 1992.

—— "Address to the Tenth National Women's Rights Convention on Marriage and Divorce." *Elizabeth
Cady Stanton, Feminist as Thinker*. Ed. Ellen Dubois and Richard Smith. NY: New York UP. 2007.

Stebbins, Jane E. *Fifty Years of the Temperance Cause*. Hartford: L. Stebbins. 1874.

Stowe, Harriet. *My Wife and I*. NY: AMS Press. 1967.

森岡裕一「少女の涙—禁酒小説における「共依存」とセクシュアリティ」森岡裕一・堀恵子編『「依存」
する英米文学』東京：英宝社. 2008.

——「家庭の呪縛—禁酒小説における「離婚」の不在—」『言葉のしんそう（深層・真相）—大庭幸男教
授退職記念論文集』東京：英宝社. 2015.

(もりおか・ゆういち 外国語学部教授)